

〈研究論文〉

## 保育士からの指示的・受容的関わりについての 母親の認識が育児ストレスに与える影響の検討 —就労形態に着目して—

大内 善広 ・ 野澤 義隆 ・ 萩原 康仁

### 【要旨】

保育所保育士の重要な役割の1つに子育て支援が挙げられており、その基本的な姿勢として受容的な態度が指摘されている。また、母親は就労形態等によって抱えている育児ストレスが異なり、有効な関わり方が異なることも考えられる。そこで本研究では、母親の就労形態や子どもの年齢によって、保育士からの指示的関わりや受容的関わりの認識が育児ストレスに与える影響が異なるのかを検討する。併せて、保育士の関わりが適切に母親に認識されているのかについて検討する。調査の結果、正規雇用の母親において、受容的な関わりの認識が育児負担感を軽減させることが示された。一方で、保育士が指示的・受容的に関わっていると認識していたとしても、必ずしも母親にはそのように関わってもらえていると認識されていないという課題が示された。

**キーワード：** 指示的関わりの認識、受容的関わりの認識、育児ストレス、子育て支援、保育士

### 1. 問題

保育所保育士の重要な役割の1つに保護者に対する子育て支援が挙げられる。2018年に改定された保育所保育指針解説（厚生労働省，2018）においても、2008年度改定時に新たに設けられた「保護者に対する支援」の章が、今回「子育て支援」と改められ、記載内容の充実が図られている。その中で、保護者に対する基本的な姿勢として、一人一人の保護者を尊重しつつ、ありのままを受けとめる受容的な態度が求められると記載されている。また、援助の過程においては、保育士等は保護者自らが選択、決定していくことを支援することが大切であるとも述べられている。このような保護者に対する子育て支援を行う背景として、乳幼児期の子どもを持つ母親はストレスを抱えやすいことや（長谷川，2007）、それにより児童虐待につながる危険性が高まること（中谷・中谷，2006）などが示唆されていることから、受容的な態度での保育士の関わりが、母親の育児ストレスの軽減や、さらには児童虐待につながる

る不適切な養育（以下、「マルトリートメント」と表記する）の軽減に繋がることが期待されていると考えられる。

こうした保育者の子育て支援に関して、母親を対象に行われた先行研究では、高橋・木野（2020）は、保育所や幼稚園に子どもを預けている母親を対象にインタビュー調査を行い、子どもの成長や個性を受容的に理解したり対応したりすることへのニーズとともに、保護者自身に対する個別支援やコミュニケーションへの要望が高いことを指摘している。また、木田・鈴木（2019）は母親に対するインタビュー調査結果から、母親は頼りになる存在を求めている、そうした気持ちに共感し寄り添う支援を保育者が行う必要があることを示している。さらに、中道（2015）は保育相談における保育者の対応に関する保護者のニーズを質問紙法によって調査し、受容や共感といったカウンセリング的対応と同時に、提案したり助言したりといったコンサルテーション的な対応へのニーズも高いことを示している。つまり、保育者の受容的な関わり、あるいはコンサルテーション的な指示的関わりに関する母親のニーズがあることから、保育士には母親に対して指示的関わりや受容的関わりをすることが求められていると考えられる。しかし、こうしたニーズを満たすことが、母親に対して具体的にどのような影響を与えるのかについても含めて扱った研究は見られず、保育士による指示的関わりや受容的関わりの効果については明確となっていない。

一方で、保育士が指示的な関わりや受容的な関わりについての重要性を認識していたとしても、中道（2014）が保護者の気持ちを受容したり共感したりすることは難しく保育士の専門力としての力が求められると指摘しているように、そのような姿勢で保護者支援を行おうと心掛けたとしても、適切に母親に伝わるとは限らない。こうした、保育士と母親のコミュニケーションの食い違いについては、インタビュー調査等で事例が報告されているものの（例えば、中道，2013）、実際にそうした食い違いが一部の例外的なものなのか、多く見られるようなものなのかについての実態把握は行われていない。

以上のことから、保育所における保護者支援のあり方を考える上で、実際に保育士がどの程度指示的・受容的な関わり方をしているか、そうした保育士の関わりについて母親がどのように認識しているのか、その認識が母親の育児ストレスにどのような影響を与えているのかといった一連の過程について検討し、保育者の関わり方による効果を明確に示すことが必要であると考えられる。

他方、母親の就労形態に応じて育児に関連するストレスが異なることが指摘されている。荒牧・無藤（2008）は、専業主婦の方が有職者よりも子どもと関わる時間が長く、育児負担感が高いことを指摘している。また、野澤・山本・神谷・戸田（2014）においても同様に、専業主婦の方が有職者よりも育児ストレスが高いことが示されているとともに、非正規雇用の方が正規雇用と比較して生活全般の悩みが高いことが示されている。こうした状況を踏まえて、保育士には母親の就労形態に応じて、どのように支援していくことが望ましいのかを検討していく必要がある。

また、子どもの発達状況によって育児の具体的内容や悩みが変容することや、母親としての育児経験も積み重ねによって、育児に関する負担感や不安感にも違いが生じることも考えられる。そのため、保育士による子育て支援については、子どもの年齢によっても、望ましいあり方が異なる可能性もある。

そこで本研究では、まず、分析 1 として保育士の指示的な関わりや受容的な関わりが母親の認識に与える影響に関して検討する。その上で、分析 2 として保育士からの指示的な関わりや受容的な関わりについての母親の認識が育児ストレスやマルトリートメントに与える影響について検討する。その際、子どもの年齢や母親の就労形態が正規雇用か非正規雇用かといった状況によって影響が異なるかも検討する。なお、子どもの年齢については、保育所や幼稚園等の入所率が 3 歳以上において急激に増加する（厚生労働省、2016）ことから、3 歳以上児と 3 歳未満児という 2 群に分けて扱うこととする。

## 2. 方 法

**調査方法** 2013 年 6 月から 7 月にかけて A 県内の保育所 696 カ所を対象に調査協力依頼文書を発送し、協力の承諾が得られた保育所に対して、質問紙を郵送した。調査を実施するクラスとして 3 歳未満児クラス 1 クラス、3 歳以上児クラス 1 クラスの計 2 クラスを保育所長が任意に選定し、各クラスの保育士および子どもの母親に対して自記式の質問紙調査を実施した。なお、3 歳未満児クラスのみを設置している保育所においては、1 クラスのみを調査対象とした。調査用紙の配布は、まず所長からクラス担当保育士に保育士用および母親用の調査用紙を渡し、母親用の調査用紙はクラス担当保育士から母親に配布するという方法を取った。調査用紙の回収は、母親の調査用紙をクラス担当保育士が回収し、保育士の調査用紙と併せて保育所長が回収し、まとめて調査者に郵送するよう依頼した。なお、調査用紙は全て封筒の中に入れて状態で配布し、回収の際にも、他者に回答を見られないように封筒の中に入れ糊付けした状態で回収するように依頼した。

**調査項目（母親）** 勤務状況について「1. 勤務していない（育休・産休）」「2. 勤務していない（育休・産休以外）」「3. 正規の社員・公務員」「4. パート・アルバイト」「5. 派遣社員・契約社員・非常勤公務員」「6. 自営業・家族従業」「7. その他」の 7 件法で回答を求めた。

分析モデルに関わる調査項目に関して、保育士による指示的関わりや受容的関わりに関する項目については、保育所での所長経験のある保育士 1 名、社会福祉学研究者 1 名、心理学研究者 2 名の計 4 名による協議によって、指示的な関わりや受容的な関わりについて特定の場面に依存せず、保育士のアドバイスについて保護者自らが選択、決定できるような関わり方をしているかを確認するような項目となるように作成した。育児ストレス尺度については、芳賀（2001）、前原・金武・貞野（2005）、岡田・種子田・新田・中嶋（2004）を参考に作成した。この尺度は育児不安感、育児負担感、時間のなさという 3 因子で構成され、そ

それぞれの因子について3項目で測定している。また、マルトリートメント尺度については、厚生労働省(2007)を参考に作成した。具体的な質問項目については、Table1の通りである。これらは全て5件法(5.非常にあてはまる～1.全くあてはまらない)で回答を求めた。

**調査項目(保育士)** 調査対象となったクラスを担当している保育士全員に対して、クラスでの立場について「1.主に私が担当している」「2.主に他の保育士が担当している」「3.主な担当が誰か特に決めていない」「4.その他」の4件法で回答を求めた。また、母親に対する関わり方について、母親への調査項目の中の保育士の関わりについての項目と対応する形で、5件法(5.非常にあてはまる～1.全くあてはまらない)で回答を求めた(Table2)。

Table1 本調査での調査項目(母親対象)

---

**A「保育士による指示的関わりを受けとめ(指示的関わり認識)」**

A1 育児について園長や保育士からアドバイスを受けた際には、その内容を確実に実施するように求められる

**B「保育士による受容的関わりを受けとめ(受容的関わり認識)」**

B1 育児について園長や保育士からアドバイスを受けた際には、その内容を無理のない範囲で実施すれば良いと言われている

**C「育児不安感」**

C1 子どもが将来一人で自立していけるかどうか心配になる

C2 この先子どもをどのように育てていけばよいかわからない

C3 どのような子どもとの接し方が望ましいのかわからずに悩む

**D「育児負担感」**

D1 子どもを育てることが負担になっている

D2 自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう

D3 子育てそのものに、苦痛を感じる

**E「時間のなさ」**

E1 子育てのために、自分の時間がとれない

E2 子育てのために、趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている

E3 毎日の生活が、ほとんど子ども中心で忙しく感じる

**F「子どもへの不適切なかかわり(マルトリートメント)」**

F1 子どもについつい手を出してしまうことがある

F2 子どもをついついほったらかしにしてしまうことがある

F3 子どもについつい否定的な言葉を投げかけてしまうことがある

---

Table2 本調査での調査項目(保育士対象)

---

**G「保育士の指示的関わり」**

G1 育児について園長や保育士からアドバイスする際には、その内容を確実に実施してもらうように伝えている

**H「保育士の受容的関わり」**

H1 育児について園長や保育士からアドバイスする際には、その内容を無理のない範囲で母親に実施してもらうよう伝えている

---

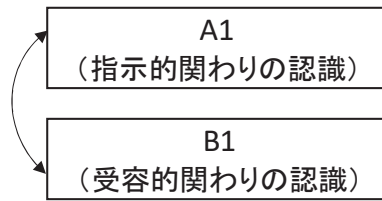
**分析対象** 調査の結果、118 箇所の保育所より、保育士 724 件、母親 2,984 件の回答が得られた。その内、母親については就労形態について「1. 勤務していない（育休・産休）」「2. 勤務していない（育休・産休以外）」「7. その他」以外の回答をしているデータ、保育士についてはクラスでの立場について「1. 主に私が担当している」と回答しているデータを分析対象とした。最終的に、分析 1 では保育士と母親の両方から回答があった 102 箇所の保育所、3 歳未満児クラス 86 箇所、3 歳以上児クラス 93 箇所より得られた、保育士については 3 歳未満児クラス 151 件、3 歳以上児クラス 138 件の計 289 件、母親については 3 歳未満児クラス 881 件、3 歳以上児クラス 1199 件の計 2080 件のデータを分析対象とした。分析 2 では 104 箇所の保育所、3 歳未満児クラス 101 箇所、3 歳以上児クラス 100 箇所より得られた 3 歳未満児クラス 1017 件、3 歳以上児クラス 1294 件、計 2311 件の母親のデータを分析対象とした。

**分析 1** 分析 1 では Figure1 のような、保育士の指示的な関わりや受容的な関わりが、そうした関わりについての母親の認識に影響を与えるというモデルを分析した。データの構造が、あるクラスにおいて少数の保育士と多数の母親が対応するという形となるため、マルチレベルモデリングの枠組みで分析した。また、保育士の人数がクラスによって異なるため、保育士の指示的関わりや受容的関わりについては、クラス単位の回答の平均値を使用した。

**分析 2** 分析 2 では Figure2 のような、保育士からの指示的・受容的な関わりへの認識が、育児ストレスである育児不安感、育児負担感、時間のなさを介してマルトリートメントに影響を与えるというモデルを分析した。また、指示的・受容的な関わりへの認識については、保育士からの関わりを受けている程度によっても関連することが考えられるため、相関を仮定した。さらに、育児ストレスについても、相互に相関関係があると考えられるため、育児負担感と育児不安感の間に相関を仮定し、時間のなさは、育児不安感、育児負担感に影響を与えるというパスを仮定した。なお、分析にあたっては、3 歳未満児クラス、3 歳以上児クラスの 2 群に対し、それぞれ就労形態が正規雇用（就労形態について「3. 正規の社員・公務員」と回答）か非正規雇用（就労形態について「4. パート・アルバイト」「5. 派遣社員・契約社員・非常勤公務員」「6. 自営業・家族従業」のいずれかと回答）かによってさらに 2 群に分け、3 歳未満児-正規雇用群（559 件）、3 歳未満児-非正規雇用群（458 件）、3 歳以上児-正規雇用群（573 件）、3 歳以上児-非正規雇用群（721 件）の 4 群での多母集団同時分析を行った。その際、母集団間で育児不安感、育児負担感、時間のなさ、マルトリートメントの各因子から観測変数へのパス係数である因子負荷量について群間で同値であるという弱測定不変の制約を置いた。

なお、分析 1 および分析 2 ともに、分析にあたっては、Mplus (Muthén & Muthén, 1998-2018) の Version.8.2 を用いた。その際、ロバスト最尤推定法を用い、保育所のクラスによるクラスターリングの影響を考慮したモデルによって分析を行った。

WITHIN (母親レベル)



BETWEEN (クラスレベル)

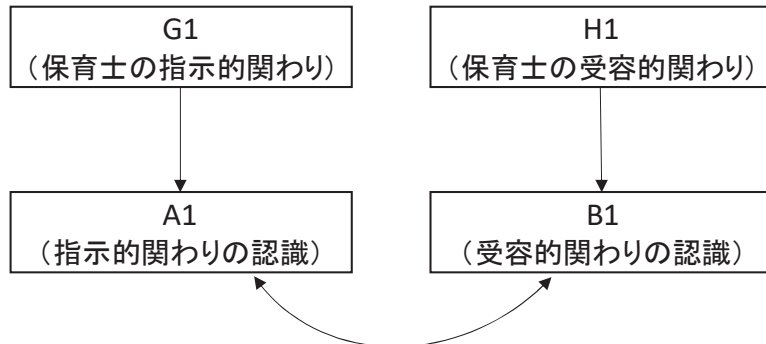


Figure1 分析1のモデル

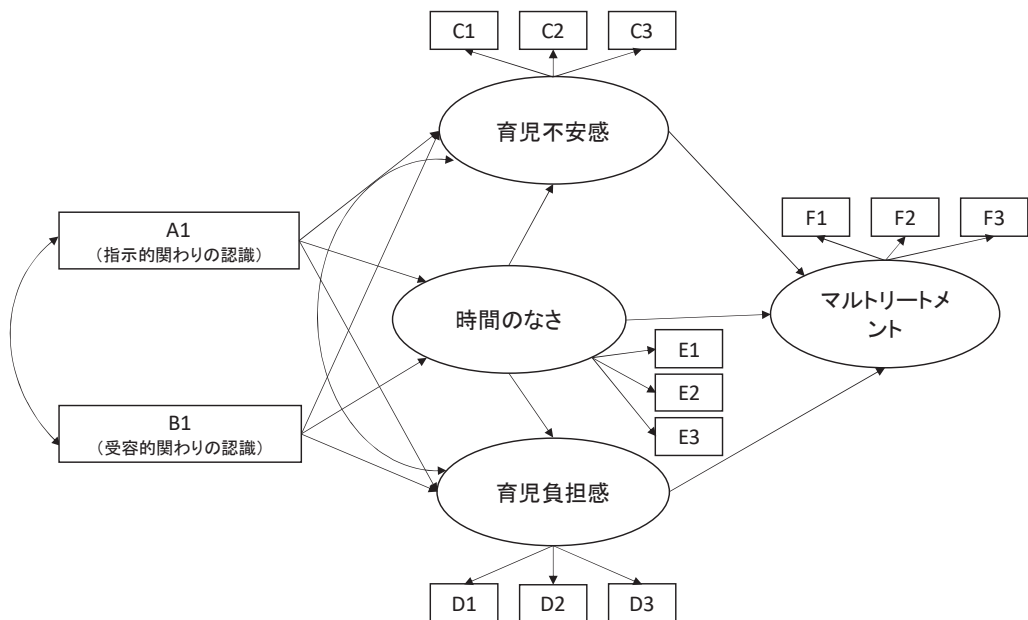


Figure2 分析2のモデル

**倫理的配慮** 本調査は、まず、各保育所の所長に調査依頼をし、調査は無記名で実施すること、結果はすべて統計的に処理するため特定の保育所の回答は公表されないこと、1人1人

の氏名や回答が公表されることはないなどの倫理的配慮について文書で伝えた。次に、調査への承諾が得られた調査対象者には、本調査は無記名で実施し、回答はすべて統計的に処理するため個人が特定されることはないこと、本調査は研究以外の目的には使用しないこと、回答しにくい項目については無理に回答を求めるものではないなどの倫理的配慮について文書で伝えた上で調査を実施した。

### 3. 結果

分析 1 のモデルを分析した結果、モデルは識別され、Table3 のような記述統計量および Table4 のような推定値が得られた。モデルの適合度指標は、RMSEA=.023、CFI=.913、TLI=.740、SRMR(Within)=.000、SRMR(Between)=.088 であった。

記述統計量については、保育士の指示的関わりおよび指示的関わりの認識については平均がともに 2.8 程度である一方、保育士の受容的関わりの平均は 4.205、受容的関わりの認識については平均が 3.817 と若干の乖離が見られた。また、分析 1 のモデルの結果については、特に保育士の指示的関わりから指示的関わりの認識へのパス係数が 0.027、保育士の受容的関わりから受容的関わりの認識へのパス係数が 0.042 と、ともに有意ではなかった。

次に分析 2 のモデルについて分析した結果、モデルは識別された。各観測変数の記述統計量は Table5、各因子に対する因子負荷量の非標準化解は Table6、分析モデルに関するパス係数の標準化解は Table7 の通りとなった。その他の推定値については Appendix1 に示す。なお、モデルの適合度指標は、RMSEA=.044、CFI=.967、TLI=.962、SRMR=.040 であった。また、本分析モデルにおいては、推定しているパス係数が 44 となり、5%水準で各パス係数に対して有意性検定を行った場合、モデル全体として第一種の過誤が生じる確率が非常に高くなってしまふことが懸念されるため、パス係数の有意性検定に関しては、Holm 法による修正を加えた。一方で、Holm 法による修正によって検出力が低下することを鑑み、10%水準までのパスを取り上げて解釈することとした。

Table3 分析 1 の記述統計量

	平均	分散
(母親)		
A1(指示的関わりの認識)	2.871	0.939
B1(受容的関わりの認識)	3.817	0.787
(保育士)		
G1(保育士の指示的関わり)	2.794	0.544
H1(保育士の受容的関わり)	4.205	0.336

Table4 分析1の推定値(半標準化解)

		推定値	標準誤差	$p$
(母親レベル)				
<u>相関</u>				
	A1-B1	0.100	0.024	0.000
<u>分散</u>				
	A1	0.923	0.028	0.000
	B1	0.756	0.031	0.000
(クラスレベル)				
<u>パス係数</u>				
	G1→A1	0.027	0.029	0.344
	H1→B1	0.042	0.046	0.361
<u>切片</u>				
	A1	2.793	0.080	0.000
	B1	3.644	0.194	0.000
<u>相関</u>				
	A1-B1	-0.009	0.008	0.244
<u>残差分散</u>				
	A1	0.016	0.011	0.139
	B1	0.031	0.010	0.002

Table5 分析2の各観測変数の記述統計量

	3歳未満児クラス				3歳以上児クラス			
	正規雇用		非正規雇用		正規雇用		非正規雇用	
	平均	分散	平均	分散	平均	分散	平均	分散
A1 指示的関わりの認識	2.714	0.961	2.924	0.961	2.879	0.817	2.986	0.960
B1 受容的関わりの認識	3.882	0.792	3.878	0.779	3.751	0.709	3.785	0.821
C1 育児不安感1	2.394	1.376	2.657	1.460	2.743	1.491	2.839	1.554
C2 育児不安感2	2.112	0.872	2.391	1.166	2.306	1.160	2.398	0.999
C3 育児不安感3	2.331	1.165	2.515	1.391	2.479	1.278	2.537	1.260
D1 育児負担感1	1.789	0.701	1.934	0.993	1.886	0.982	1.962	0.922
D2 育児負担感2	1.854	0.973	2.060	1.336	1.927	1.169	2.031	1.098
D3 育児負担感3	1.546	0.638	1.704	0.871	1.667	0.892	1.765	0.827
E1 時間のなさ1	3.415	1.308	3.051	1.533	3.250	1.568	2.898	1.424
E2 時間のなさ2	3.139	1.476	2.854	1.611	3.028	1.509	2.696	1.458
E3 時間のなさ3	3.572	1.284	3.461	1.348	3.425	1.469	3.278	1.373
F1 マルトリートメント1	2.416	1.465	2.898	1.451	2.830	1.490	2.966	1.330
F2 マルトリートメント2	2.637	1.047	2.854	1.091	2.889	1.011	2.931	0.962
F3 マルトリートメント3	2.677	1.276	2.936	1.218	3.191	1.004	3.179	0.948



Table6 分析2の各因子の因子負荷量（非標準化解）

		因子負荷量	標準誤差	切片	標準誤差
<b>育児不安感</b>					
	C1	1.000	0.000	2.853	0.170
	C2	1.130	0.034	2.508	0.190
	C3	1.060	0.035	2.661	0.177
<b>育児負担感</b>					
	D1	1.000	0.000	2.186	0.161
	D2	0.886	0.027	2.222	0.143
	D3	0.975	0.017	1.960	0.156
<b>時間のなさ</b>					
	E1	1.000	0.000	3.448	0.252
	E2	0.953	0.019	3.211	0.238
	E3	0.760	0.020	3.657	0.194
<b>マルトリートメント</b>					
	F1	1.000	0.000	2.687	0.079
	F2	0.832	0.035	2.747	0.064
	F3	1.193	0.048	2.890	0.093

また、育児不安感、育児負担感、時間のなさ、マルトリートメントの各因子の信頼性を検討するために、 $\omega$ 係数を算出した。この結果、 $\omega$ 係数の推定値は、育児不安感が.822、育児負担感が.842、時間のなさが.851、マルトリートメントが.747であった。

3歳未満児-正規雇用群、3歳未満児-非正規雇用群、3歳以上児-正規雇用群、3歳以上児-非正規雇用群の4群に共通して、時間のなさから不安感、負担感への正の影響が見られ、さらに、不安感、負担感からマルトリートメントへの正の影響が見られた。群別での結果については、3歳未満児-正規雇用群において指示的関わりの認識から負担感への負の影響が見られた。また、3歳以上児-正規雇用群において指示的関わりの認識から負担感への正の影響、受容的関わりの認識から負担感への負の影響、指示的関わりの認識から時間のなさへの負の影響が見られた。

Table7 分析2の分析モデルにおけるパス係数の推定値(標準化解)

3歳未満児クラス						
	正規雇用			非正規雇用		
	推定値	標準誤差	$\rho$	推定値	標準誤差	$\rho$
<u>不安感へのパス</u>						
指示的関わりの認識	0.005	0.042	0.901	0.028	0.050	0.578
受容的関わりの認識	-0.107	0.039	0.006	-0.032	0.055	0.565
時間のなさ	<u>0.394</u>	0.042	0.000 *	<u>0.400</u>	0.058	0.000 *
<u>負担感へのパス</u>						
指示的関わりの認識	0.081	0.038	0.034	-0.073	0.048	0.126
受容的関わりの認識	<u>-0.182</u>	0.042	0.000 *	-0.077	0.056	0.169
時間のなさ	<u>0.498</u>	0.040	0.000 *	<u>0.486</u>	0.044	0.000 *
<u>時間のなさへのパス</u>						
指示的関わりの認識	-0.099	0.050	0.045	-0.139	0.055	0.011
受容的関わりの認識	0.051	0.050	0.308	-0.049	0.049	0.314
<u>マルチリートメントへのパス</u>						
不安感	<u>0.229</u>	0.075	0.002 +	<u>0.308</u>	0.089	0.001 *
負担感	<u>0.232</u>	0.076	0.002 +	<u>0.275</u>	0.081	0.001 *
時間のなさ	-0.018	0.059	0.762	-0.133	0.068	0.051
3歳以上児クラス						
	正規雇用			非正規雇用		
	推定値	標準誤差	$\rho$	推定値	標準誤差	$\rho$
<u>不安感へのパス</u>						
指示的関わりの認識	0.094	0.040	0.018	0.014	0.039	0.716
受容的関わりの認識	-0.102	0.043	0.017	-0.008	0.052	0.873
時間のなさ	<u>0.358</u>	0.046	0.000 *	<u>0.371</u>	0.042	0.000 *
<u>負担感へのパス</u>						
指示的関わりの認識	<u>0.114</u>	0.036	0.002 *	0.059	0.040	0.144
受容的関わりの認識	<u>-0.122</u>	0.041	0.003 +	-0.080	0.043	0.063
時間のなさ	<u>0.524</u>	0.034	0.000 *	<u>0.573</u>	0.032	0.000 *
<u>時間のなさへのパス</u>						
指示的関わりの認識	<u>-0.165</u>	0.051	0.001 *	-0.041	0.044	0.360
受容的関わりの認識	-0.064	0.050	0.200	-0.001	0.044	0.977
<u>マルチリートメントへのパス</u>						
不安感	<u>0.295</u>	0.064	0.000 *	<u>0.300</u>	0.054	0.000 *
負担感	<u>0.267</u>	0.067	0.000 *	<u>0.206</u>	0.060	0.001 *
時間のなさ	0.028	0.057	0.619	-0.092	0.060	0.126

\*かつ下線は5%水準、+かつ下線は10%水準で有意(Holm法による修正後)

## 4. 考 察

本研究は、保育士の指示的関わりや受容的関わりが、母親の認識にどのように影響を与えているのか、またその認識が育児ストレスにどのような影響を与えるのかを検討した。まず、保育士がどのような関わり方をしているのかについては、Table3 の結果から、保育士の指示的な関わりの平均が 2.794 であり、保育士によって指示的な関わり方をするかしないが異なるのに対し、保育士の受容的な関わりの平均が 4.205 であり、ほとんどの保育士は受容的に関わっていることが示唆された。そうした保育士の関わりに対する母親の認識については、指示的関わりの認識の平均が 2.871 と保育士の回答と同程度である一方で、受容的関わりの認識の平均が 3.817 と保育士よりもやや低い傾向が見られた。また、保育士の指示的関わりおよび受容的関わりから母親の認識へのパス係数も有意ではなかった。こうした結果は、保育士は受容的な関わりについての重要性を認識し実践しようとしているが、必ずしも全ての母親に対して適切にその姿勢が受けとめられていないという課題がある可能性を示している。

一方で、保育士からの指示的関わりや受容的関わりについての母親の認識が育児ストレスに与える影響については、正規雇用の母親においては、3 歳未満児、3 歳以上児ともに、受容的な関わりの認識が負担感や不安感といった育児ストレスを軽減する傾向が示された。こうした不安感や負担感を軽減することはマルトリートメントの軽減に繋がるため、少なくとも正規雇用の母親においては、保育士が受容的に関わっていると母親に認識してもらうことが、児童虐待の予防に寄与することが示唆された。指示的な関わりの認識については、3 歳以上児-正規雇用群について、負担感を高める一方で、時間のなさを軽減させるという結果が示された。時間のなさを軽減は間接的に不安感や負担感を軽減させることに繋がるが、指示的関わりの認識から時間のなさへのパス係数 (-0.165) と時間のなさから負担感へのパス係数 (0.524) を掛け合わせた間接効果 (-0.165×0.524=-0.087) は、指示的関わりの認識から負担感へのパス係数 (0.114) より低いため、全体的に見れば、少なくとも育児ストレスを軽減する効果があるとは言えないと考えられる。

また、非正規雇用の母親に関しては、3 歳未満児クラス、3 歳以上児クラスともに指示的関わりや受容的関わりの認識が育児ストレスに影響を与えていないという結果となった。これは、Table5 において、正規雇用群と比べ、非正規雇用の群の方が、全ての観測変数において育児不安感や育児負担感が高く、時間のなさが低いという傾向が見られることも関係していると考えられる。荒牧・無藤 (2008) や野澤ら (2014) が指摘しているように、就労形態によって母親の育児ストレスは異なっており、非正規雇用の母親には、今回の調査で取り上げた育児に関するアドバイスにおける受容的関わり以外の支援についての認識が育児ストレス軽減に繋がっている可能性がある。ただし、3 歳以上児クラスにおいては、受容的関わりの認識から育児負担感へのパス係数の有意確率が 10%を下回っているため、今後非正規雇用に焦点を当て、受容的関わりの認識についてもより詳細な内容を含めて検討することによって、

非正規雇用の母親への有効な支援について示すことが可能となることも考えられる。今回の調査結果からは、非正規雇用の母親に対して、どのような保育士の関わりの認識が重要なかを明確に示すことは出来なかったが、少なくとも母親の就労形態によって、育児ストレス軽減のための保育士の有効な関わり方が異なってくる可能性は示されたと言えよう。

最後に、本研究の限界として、2つの課題を挙げる。1つ目の課題は、パス係数に関する有意性の検定に Holm 法による修正を加えたため、検出力が低くなったことである。今後の研究において、受容的関わりのみを焦点を当てて育児ストレスへの影響を検討するなど、研究対象を絞った上で調査を行うことによって、より明確に受容的関わりの効果を明らかに出来ると考えられる。2つ目の課題は、指示的関わりや受容的関わりに関する調査項目の問題である。本研究で調査を行うにあたり、保育士が保護者と関わる特定の場面に依存しないように、保育士からのアドバイスについて指示的に行うのか受容的に行うのかということを探る項目を使用した。しかし、保育士が保護者に関わる場面は多様であり、場面ごとに受容的な関わり方も異なっているため、本研究で取り上げた受容的関わりは、その一部を扱っているに過ぎない。保育士が保護者に対して受容的に関わるのが重要であることを示すためには、今後も保育相談場面などの個別の場面における受容的な関わり方に関する研究の蓄積を進めていく必要がある。

これらの限界を踏まえつつも、本研究の結果により、保育士が母親に伝わるように受容的な関わりをすることが育児ストレス軽減に繋がりうるという実態を示せたことには、子育て支援のあり方を検討する上で一定の意義があると考えられる。本研究の知見を保育現場に還元していくためにも、保育士の関わり方と、その関わり方に関する保護者の認識についてより詳細に検討を進めていく必要がある。

## 【参考文献】

- 荒牧美佐子・無藤隆（2008）育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に，発達心理学研究，19(2)，87-97.
- 芳賀道（2001）母親の育児ストレスに対する父親のソーシャル・サポートの緩衝効果について，中央大学大学院研究年報，30，211-218.
- 長谷川麻衣（2007）母親の育児ストレスと母子相互交渉：縦断研究による検討，発達研究，21，151-162.
- 木田千晶・鈴木裕子（2019）家族への期待度が母親間の人間関係構築に及ぼす影響：保育者養成教育における「子育て支援」「子ども家庭支援論」の基礎資料として，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，4，33-40.
- 厚生労働省（2007）子ども虐待対応の手引き。  
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/00.html>（最終閲覧日：2020年12月24日）
- 厚生労働省（2016）社会保障審議会児童部会保育専門委員会（第2回）資料2 保育をめぐる現状

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan->

Sanjikanshitsu\_Shakaihoshoutantou/02siryous.pdf (最終閲覧日：2020年12月24日)

厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説<平成30年3月>, フレーベル館.

前原武子・金武育子・貞野政人 (2005) 母親の被養育経験と育児ストレス：育児効力感およびソーシャル・サポートの媒介機能, 琉球大学教育学部紀要, 67, 273-282.

Muthén, L.K. & Muthén, B.O. (1998-2018) Mplus User's Guide. Seventh Edition. Los Angeles, CA: Muthén & Muthén.

中道美鶴 (2013) 保育相談を受ける保育者の専門性について：乳幼児相談事例を保護者再度から考察することで, 環太平洋大学研究紀要, 7, 61-69.

中道美鶴 (2014) 保育相談を受ける保育者の専門性について (2)：保護者の相談に対する応答傾向, 環太平洋大学研究紀要, 8, 39-45.

中道美鶴 (2015) 保育相談を受ける保育者の専門性について (3)：相談に対する保育者の応答傾向を保護者の立場から考察して, 環太平洋大学研究紀要, 9, 45-51.

中谷奈美子・中谷素之 (2006) 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究, 17(2), 148-158.

野澤義隆・山本理絵・神谷哲司・戸田有一 (2014) 乳幼児を持つ父母の家事・育児時間が母親の育児期ストレスに及ぼす影響：全国調査 (保育・子育て3万人調査) の経年比較より, エデュケア, 34, 1-8.

岡田節子・種子田綾・新田収・中嶋和夫 (2004) 障害児育児ストレス認知尺度の因子不変性, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 18, 183-189.

高橋靖子・木野和代 (2020) 保護者の望む「共感的関わり」に関する質的検討：母親のインタビューに基づいて, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 5, 69-75.

## 付 記

本研究は、2011～2014年度科学研究費助成事業（基盤研究C）「母親の育児ストレスを軽減させる保育所や保育士の取り組みの研究（課題研究番号：23530803、研究代表者：城西国際大学 大内善広）」の補助を受けて行われた。また、本研究の一部は日本発達心理学会第26回大会および日本教育心理学会第56回総会にて発表された。

Appendix1 分析2におけるその他の推定値

		未満児クラス						以上児クラス					
		正規雇用			非正規雇用			正規雇用			非正規雇用		
		推定値	標準誤差	$\rho$	推定値	標準誤差	$\rho$	推定値	標準誤差	$\rho$	推定値	標準誤差	$\rho$
平均	A1	2.767	0.091	0.000	2.982	0.121	0.000	3.185	0.107	0.000	3.044	0.083	0.000
	B1	4.361	0.218	0.000	4.392	0.192	0.000	4.456	0.180	0.000	4.177	0.148	0.000
切片	C1	2.387	0.149	0.000	2.327	0.141	0.000	2.316	0.148	0.000	2.315	0.147	0.000
	C2	2.668	0.203	0.000	2.338	0.180	0.000	2.346	0.189	0.000	2.500	0.201	0.000
	C3	2.524	0.168	0.000	2.248	0.158	0.000	2.331	0.166	0.000	2.376	0.166	0.000
	D1	2.599	0.200	0.000	2.188	0.170	0.000	2.225	0.181	0.000	2.275	0.176	0.000
	D2	2.273	0.158	0.000	1.914	0.137	0.000	2.051	0.145	0.000	2.111	0.146	0.000
	D3	2.452	0.186	0.000	2.100	0.183	0.000	2.060	0.182	0.000	2.157	0.185	0.000
	E1	2.992	0.233	0.000	2.798	0.225	0.000	2.775	0.215	0.000	2.856	0.215	0.000
	E2	2.659	0.205	0.000	2.523	0.203	0.000	2.599	0.204	0.000	2.668	0.204	0.000
	E3	3.256	0.199	0.000	3.108	0.176	0.000	2.994	0.175	0.000	3.177	0.178	0.000
	F1	2.219	0.076	0.000	2.226	0.084	0.000	2.155	0.075	0.000	2.327	0.088	0.000
	F2	2.666	0.083	0.000	2.648	0.090	0.000	2.759	0.092	0.000	2.816	0.088	0.000
	F3	2.563	0.095	0.000	2.601	0.105	0.000	2.892	0.122	0.000	2.961	0.119	0.000
	不安感	0.000	-	-	0.045	0.282	0.872	0.030	0.291	0.917	0.070	0.287	0.807
	負担感	0.000	-	-	0.424	0.346	0.220	-0.065	0.286	0.821	0.200	0.272	0.462
	時間のなさ	0.000	-	-	0.296	0.315	0.347	0.620	0.371	0.095	-0.388	0.313	0.216
	マルチリートメント	0.000	-	-	0.187	0.087	0.031	0.470	0.080	0.000	0.385	0.082	0.000
分散	A1	1.000	-	-	1.000	-	-	1.000	-	-	1.000	-	-
	B1	1.000	-	-	1.000	-	-	1.000	-	-	1.000	-	-
相関	A1-B1	0.073	0.050	0.140	0.127	0.055	0.022	0.053	0.050	0.285	0.182	0.045	0.000
残差共分散	不安感-負担感	0.538	0.042	0.000	0.528	0.054	0.000	0.570	0.041	0.000	0.484	0.045	0.000
残差分散	C1	0.608	0.032	0.000	0.520	0.035	0.000	0.514	0.029	0.000	0.549	0.029	0.000
	C2	0.191	0.034	0.000	0.198	0.034	0.000	0.175	0.035	0.000	0.131	0.031	0.000
	C3	0.434	0.033	0.000	0.421	0.036	0.000	0.363	0.030	0.000	0.386	0.031	0.000
	D1	0.321	0.031	0.000	0.254	0.035	0.000	0.223	0.029	0.000	0.248	0.026	0.000
	D2	0.605	0.032	0.000	0.566	0.030	0.000	0.498	0.032	0.000	0.508	0.032	0.000
	D3	0.284	0.030	0.000	0.187	0.027	0.000	0.211	0.032	0.000	0.200	0.022	0.000
	E1	0.204	0.029	0.000	0.178	0.032	0.000	0.237	0.028	0.000	0.252	0.028	0.000
	E2	0.342	0.033	0.000	0.299	0.026	0.000	0.299	0.031	0.000	0.316	0.027	0.000
	E3	0.516	0.030	0.000	0.479	0.029	0.000	0.544	0.031	0.000	0.525	0.029	0.000
	F1	0.596	0.034	0.000	0.565	0.036	0.000	0.656	0.030	0.000	0.626	0.030	0.000
	F2	0.613	0.031	0.000	0.592	0.033	0.000	0.626	0.035	0.000	0.637	0.033	0.000
	F3	0.338	0.042	0.000	0.269	0.044	0.000	0.238	0.040	0.000	0.256	0.042	0.000
	不安感	0.837	0.033	0.000	0.840	0.044	0.000	0.859	0.032	0.000	0.862	0.031	0.000
	負担感	0.730	0.039	0.000	0.736	0.042	0.000	0.710	0.037	0.000	0.665	0.037	0.000
	時間のなさ	0.988	0.011	0.000	0.976	0.016	0.000	0.967	0.019	0.000	0.998	0.003	0.000
	マルチリートメント	0.834	0.038	0.000	0.777	0.044	0.000	0.726	0.040	0.000	0.829	0.039	0.000

A study of the effects of mothers' cognitions about  
directive/acceptive support from childcare workers on  
childcare stress:

Focused on the regular or non-regular employment

Yoshihiro Oouchi, Yoshitaka Nozawa, Yasuhito Hagiwara

Abstract

Parenting support is mentioned as one of the important roles of childcare workers. And in its support, the importance of receptive attitudes has been pointed out. In addition, it is possible that mothers have different childcare stress depending on their working style, etc., and their effective support with mothers differs. In this study, we examine whether the effects of childcare workers' directive and acceptive support on childcare stress differ depending on the working style of the mother and the age of the child. Further, we examine whether the support of childcare workers is properly recognized by the mother. The results showed that receptive support reduces the burden of childcare in regular-employed mothers. On the other hand, the problem was suggested that even if childcare workers were aware that they were involved in a directive and receptive manner, they were not necessarily recognized by mothers as being involved in such a way.

Key words: cognition about directive support, cognition about acceptive support, childcare stress, parenting support, childcare workers